

週刊 座、グレート・リーダーズ通信

『インド私録-思い切り取り組んだこの 50 年-』 No.24

今週のキーワード！ カーマイケル Rd ムンバイのピバリーヒルズ

人口の多さでメキシコシティ、上海について世界第 3 位のムンバイは、土地の狭さと経済発展を背景に高層化が進む都市であり、また、スラム街の存在でも知られますが、在ボンベイ(現ムンバイ)日本総領事館が建つカーマイケル・ロード(現ダハヌカル・マルグ)沿いには、大邸宅が立ち並び、いまなお英領時代の雰囲気を守っています。

カーマイケル・ロードは南北に 1 キロばかりも伸びていますが、中でも日本総領事館のある辺りは、広大な緑地を持つ屋敷がある

ため(下地図ご参照)、都会の喧騒から離れることができます。この通り沿いにはいくつか総領事館がありますが、『インド私録』に記されているように、州政府高官や中央銀行総裁の公邸、財界人の私邸など、隣人にはそうそうたる名が並びます。日本の品格を現すためにも、任地での友好を図ることが任務の 1 つである総領事の公館・公邸として、カーマイケル・ロード以外にふさわしい立地はないのではないでしょうか。

在ボンベイ日本総領事館のホームページによれば、ボンベイ総領事館は 1894 年(明治 27 年)に、インドで最初の在外公館として

開設されました。

武藤氏によれば、現在の日本総領事館の建物は『インド私録』にあるように、拝火教の富豪、モディ一家から日本政府が購入したもので、日本の国有財産ということになります。

建物は、1959 年、ネルー首相が率いる国民会議派の社会主義的経済政策に反対する右よりのスワタントラ(独立)党結成の地という、歴史的背景を持ち、武藤氏は「インドの現代政治に関心を持つ私には、その意味からもこの建物は興味深いものがあつた」と『インド私録』に書いています。

そして、その建物の前を通るカーマイケル・ロードは、ムンバイの政財界の重鎮やジャーナリストが総領事館を訪れるために往来し、第 22 号の当通信でご紹介したように、ラタン・タタ氏(タタ財閥総帥)が赤いジャガーのオープンカーを運転して武藤総領事を訪ねてきた道。また、多くの無名のインド人が日本へのビザ取得のために足を運ぶ道でもあります。カーマイケル・ロードは、日印の歴史を作る足跡で踏み固められているといえそうです。

第 26 回放送は、
11 月 23 日(祝)です。

